くまなき月が空を渡る

97 渡月橋

とげつきょう

日本有数の景勝地嵐山に架かる渡月橋は、その外観から木橋と思う人が多いかも知れないが、れっきとした鉄の橋である。現在の渡月橋は昭和９年（1934）にコンクリート杭と鋼桁の橋となった。「外形上旧態を保存すること」に注意が払われたため、本体は木橋ではないが、木製の桁かくしや高欄に古くからの木造の様式を採用することによって、外見的には木橋に見える。

渡月橋の歴史は古代にまでさかのぼる。正倉院文書の中に葛野郡橋頭郷という地名が見えるが、これが今の渡月橋付近にあたるとされ、奈良時代にすでに橋が架けられていた可能性がある。嵯峨野一帯は渡来系の氏族・秦氏によって開発された。養蚕、機織、土木事業などにすぐれた技術を発揮した秦氏は、農地開発のために桂川（大堰川）に葛野大堰をつくっている。そして秦氏の支配地が川の両岸に広がっていたから、その連絡のために橋を架けた可能性は高いと思われる。

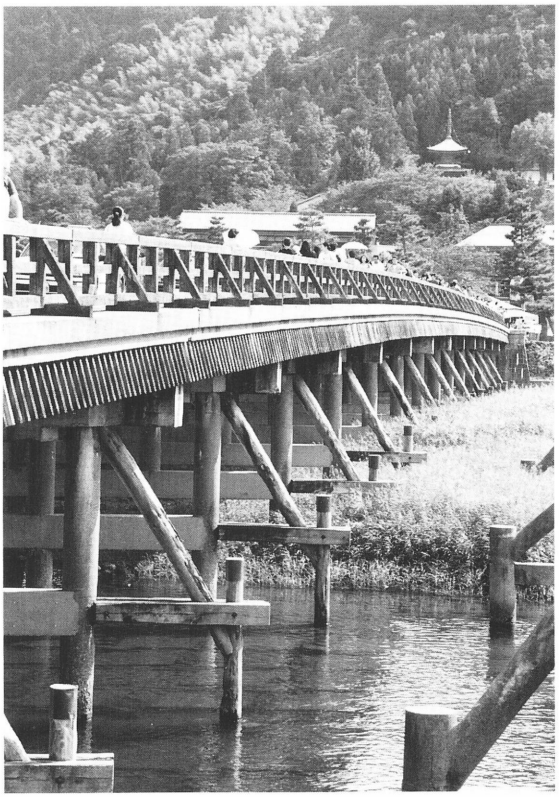
中世以降嵐山一帯は天龍寺の支配下にあったが、橋の管理は南側にある法輪寺の責任で、橋は別名法輪寺橋と呼ばれることもあった。大堰川にはぐくまれた嵐山は、平安貴族の避暑地としても親しまれ、紅葉の名所としての名声も、鎌倉時代には定着していたようである。「渡月橋」という名前は、亀山天皇が「くまなき月が空を渡る」のに似るという意味から名づけたといわれている。

江戸時代初期の実業家角倉了以は、大堰川の上流の保津川を開削し、丹波地方から都への輸送路を確保すると同時に、渡月橋の架け替えも行なっている。このときから橋は現在の位置になったといわれている。その後も橋の管理は法輪寺が行なっていたようで、後期になると、維持管理費用を捻出するために、年限を切って橋を利用する人々から橋銭を徴収していたようである。法輪寺は本尊の虚空蔵菩薩から福徳知恵を授かるとして、「十三まいり」で賑わう。お参りしたあと渡月橋を渡るとき、後ろを振り返ると、せっかく授かった知恵が逃げてしまうという言い伝えが今でも残っている。

木橋時代の渡月橋は構造的には粗末なもので、明治になっても人一人がやっと通れるていどの仮橋であったため、洪水による被害をたびたび受けている。しかし、そのもろく、か細い姿は嵐山の風景にとってなくてはならないものになった。現在の橋のスパンは10m強と短いため、外観的には違和感はない。この橋は、近代橋としての自己主張を放棄したところに、人々の共感を呼ぶのであろう。〔MH〕

竣工年月：昭和９年（1934）６月
所在地：京都市右京区
河川名：大堰川
橋長・幅員：158.5m×11.1m（車道１×7.1m＋歩道２×2.0m）
径間数・支間長：15×10.3m
形　式：上路プレートガーダー

(1:25,000　京都西北部)



〈1987年9月，撮影・共に松村　博〉

遠方に法輪寺が見える。